

# 「核ゴミで地域おこし」を拒否し 条例の制定や「自給圏」づくりを

■道北の住民団体が「ほろのべ核のゴミを考える全国交流会」

7月29日、30日の2日間、「ほろのべ核のゴミを考える全国交流会」が宗谷管内豊富町で開かれた。道内外から約60人が参加し、幌延深地層研究センターで実施中の「核のゴミ」処分研究を止めさせるための活動などをテーマに議論を深めた。

「核廃棄物施設の誘致に反対する道北連絡協議会」（共同代表・山路弦太さんら3人）などで行く実行委が2009年から毎年夏に開催（コロナ禍で一時的に中断）している。



道内外から約60人が参加。住民団体などからの報告や主催者による問題提起をもとに議論を深めた

今回は、日本原子力研究開発機構

（原子力機構）が深度500メートル

坑道の掘削を始めたことに加え、処

分事業者のNUMO（原子力発電環

境整備機構）が「国際共同研究」の名

目で幌延の研究に参加した事態を受

け、「このままでは『核を持ち込まな

い』『処分場にしない』という、道や

道民との約束も反故にされかねな

い」と捉え、交流を通して運動のあ

り方を再考することになった。

交流会の冒頭、道北連絡協議会の

共同代表のひとりで稚内市在住の東

道（あづま）さんが次のように訴えた。

「原子力機構は『地層処分に向けた

基盤技術の整備の完了が確認できれ

ば研究を終える』としているが、こ

れは『完了が確認できない場合は、

当初の約束を反故にしてもいい』と

も解釈できる。地元や周辺から反対

の動きをつくらないと、この流れは

阻止できない。地元の首長が反対す

れば『核のゴミ』は持ち込めない。今  
後、全道各地で原子力で地域おこし  
をしないよう要請してほしい」

道北連絡協議会では、幌延町の周

辺自治体に「核のゴミによる地域お

こし拒否の表明」を求める活動を2

018年から続けており、今年は宗

谷管内の豊富・浜頓別・中頓別・猿

払の4町村長と面談して要請を行

なった。

「豊富町民の会」代表の山路さん（酪

農家）は、「先輩たちの姿勢に学びな

がら世代を引き継いでいきたい」と

前置きして、こう話した。

「反対の看板を作っていると、商工

会の女性会員のひとりから『核ゴミ

は『いらぬ』では弱いから『拒否』に

してほしいと求められた。皆で看板

を作ること、活動が次の世代に伝

わると思う。今後は『町民の会』とし

て核ゴミ拒否条例の制定に向けた取

り組みを進めたい」

NUMOの事前調査が進む後志管

内寿都町から参加した三木信香さん

（子どもたちに核のゴミのない寿都

を！町民の会）共同代表も発言。日

弁連の大会で5分間のスピーチをす

るため旭川まで往復したり、町議会

で意見陳述した体験を振り返り、

「（活動には）そのまちに合ったやり  
方があると思う。今ある自然を絶対  
に壊してほしくない。あとで子ども  
たちから『なぜ、あの時に反対しな  
かったの？』と言われぬように、今  
後も声を上げることを止めずに生き  
ていきたい」と力を込めた。

また、札幌の生活クラブ生協の役

員や、幌延問題の学習会を開いた名

寄の市民、旭川の労働団体メンバ

らによる活動報告もあった。

こうした発言や報告を受け、道北

連絡協議会の前代表・久世薫嗣さん

（豊富町在住）は、「彼ら（原子力機構

など）は『地層処分ができる』と見せ

るため幌延の研究を維持しようと

しており、この闘いは百年戦争にな

る。地域が一体となって『自給圏』を

創っていかないと勝てないのではな

いか」と問題提起した。

夜は分散会での意見交換、翌日に

は幌延深地層研究センターに対する

申し入れも行なわれた。

コロナ禍での2年間の中断、原子

力機構やNUMOの攻勢など懸念材

料はあったが、寿都町の住民たちと

のつながりも定着し、交流会は新た

な段階に入ったようだ。

（ルポライター・滝川康治）